

ファッションと芸術の境界を考える

—COSMIC WONDERの芸術活動を中心に—

Across the Border between the Art and the Fashion
—on the Artistic Creation of the COSMIC WONDER—

大和田 遼

Owada Haruka

文化マネジメントコース

要旨

現在、芸術の領域とデザインの領域は共に拡大しており、何が芸術で何がデザインなのかという境界が曖昧になってきている。そもそも何が芸術であるのかという定義そのものが困難になり、「芸術」に含まれるものの領域がとてつもなく広がってきていることに伴って、とりわけ芸術と、デザインの一領域であるファッション・デザインの境界も極めて曖昧になってきている。

かつて「ファッション・デザイン」という領域を築き上げたファッション・デザイナーたちは、自らが考えたファッションによって人々を美しく変化させ、ファッションによる魅力的な身体の創造に力を入れてきた。それは、社会の風潮や経済と共に発展し、ファッション・デザインという今の私達には馴染みの分野を作り上げた。時に彼らは芸術作品からインスピレーションを受け、アーティストの芸術作品をファッション・デザインの中に取り込んだ。その様なファッション・デザイナーによる試みや流行のファッションは、時代の経過とともに刻々と変化し、ファッション・デザイナー達はトレンドの創造主として多くの流行を発信した。多くのファッション・ブランドが存在する現代において、誰もが知っている有名なファッション・ブランドは、その成功者なのである。

コム・デ・ギャルソンとマルタン・マルジェラ

しかし、そんなファッションを取り巻く環境やシステムに疑問を抱く、新しいタイプのファッション・デザイナーが登場してきた。ファッション・デザイナーが生み出すデザインに興味を持ってもらうことや、そこから新たなトレンドを発信していくことよりも、コレクションからデザイナーが意図する何かを感じ取ってもらいたいという、昔なかった新しい試みが増えているのだ。造形的な服作りによって衣服と身体の関係を見つめなおしたコム・デ・ギャルソン (COMME des GARÇONS) の川久保玲や、現代芸術よりの発表方法によって、売ることばかりに気をとられているファッションへの異議申し立てをしたメゾン・マルタン・マルジェラ (Maison Martin Margiela) のマルタン・マルジェラがその代表である。コム・デ・ギャルソンが発表した「こぶドレス」は、ファッションと身体との関係を改めて見つめ直し、試行錯誤した結果につくりだされたものであった。このコレクションを通して川久保が試みたのは、身体が服を、服が身体を、両者が互いに束縛しあうような関係を脱出することであった。マルジェラによる「カビドレス」のインスタレーションは、バクテリアやカビなどの真菌類を植えた服が展示されるというものであった。菌類がつくりだす色や形は、土台の服を変化させ、

そこで服は完成する。この実験的なインスタレーションは最後に燃やされるが、それまでのプロセス全てが作品を構成する。このインスタレーションからマルジェラは、新しいもののみ価値を見出す近代の社会に対する批判をした。彼らのようなファッション・デザイナーの試みは、今もなお、鮮烈にファッションの世界に記憶され、色あせることはない。そして、彼ら試みは、今までのファッションの既成概念を覆すものがほとんどであったため、人々はその試みが「ファッション」というより「芸術」行為に近いのではないかと考え始めた。しかし、彼らはいくまでも、「ファッション」によって「ファッション」の問題に取り組んできた。例えその行為が「芸術」や「アート」と評価されても、「アート行為である意識はない」と主張し、今もなお、自身の精神を貫き、新しいファッションを提案し続けている。

コズミックワンダー

そのような流れを持った新しいファッションの世界に登場したのが、コズミックワンダー (COSMIC WONDER) であった。コズミックワンダーは日本のアパレルブランドの1つで、その活動はファッション・デザインに留まらず、印刷物の出版や現代芸術活動などにも及んでいる。どの活動においてもコズミックワンダーという名前が使われ、各分野を明確に区別することはなかった。コズミックワンダーの作品はいつも、ファッションであり芸術である。ファッション・ショーの場で芸術作品を意図的に含んだコレクションを発表し、美術館での展覧会でコズミックワンダーのファッション・デザインを発表する事もあった。



《窓に必要な影 (A Shadow Necessary for Windows)》
COSMIC WONDER、
2002年秋冬コレクション、
インスタレーション
とパフォーマンス、パリ
©1995-2001 Shiseido
Co.,Ltd

しかし、その感覚的な表現方法は、現代の芸術の概念にはすんなり受け入れられたとしても、ファッションの世界では異質なものであったに違いない。多くのファッション・ブランドが、少しでも多くの人に名前を知ってもらい、服を着て欲しいと考えている中で、コズミックワンダーが発表してきたコレクションは、あまりに着ることが難しいものがあった。しかしそれは川久保のように、着ることが難しい衣服によって、身体の再確認を提案するのではなく、それ自体が

アートとしてコレクションに組み込まれているのである。コスミックワンダーはファッション、芸術の両分野において、繰り返し「ファッションでありアートである」コレクションを発表し続けた。それまで、川久保やマルジェラの試みによって少しずつ「芸術」の領域へと侵犯していた「ファッション」は、コスミックワンダーの試みによって「芸術」への新たなアプローチを見せた。このコスミックワンダーの行為は、芸術とファッションの境界をまたいだものであり、今までに存在しなかった完全に新しい領域を作り上げようとしていた。

しかしコスミックワンダーは、突然その新しい試みを中断してしまったかのように見える。「ファッション」と「芸術活動」のレベルを設け、2つを明確に区別したのである。それまでは、まるで、作品が「ファッション」か「芸術」かの判断を観賞者に任せるようなスタイルで活動をおこなってきた。しかし、レベルによって制作活動の区別をつけたことによって、私達はそれが「ファッション」なのか「芸術」なのかを考える必要が無くなる。芸術活動を行うのがコスミックワンダー、ファッションのレベルがコスミックワンダー・ライトソースであると宣言されたからである。これは、コスミックワンダーが新しい領域の創造をやめたことを意味しているのだろうか。



《月食 (Eclipse)》COSMIC WONDER、2005 年、パフォーマンス、パリ ©1995-2001 Shiseido Co.,Ltd

私はこのように考える。コスミックワンダーの活動をレベルで区別することによって、私たち観賞者はそれが「ファッション」であること、「芸術作品」であることを区別することができる。以前までのコスミックワンダーの活動では、どちらがどちらか分からなかった二つの共演も、両分野の所属を明確にすることで、私達は二つの分野が混ざり合っていく様子を確認することができる。それは例えるならば、最初から白と黒が混ざった灰色の状態を見せられるのではなく、白と黒の絵の具が混ざり合っただけになっていく様子、私達はしっかりと意識することができるのである。

コスミックワンダーの活動は現代において、ファッションと芸術を繋ぐ新たな試みとして注目すべきものである。コスミックワンダー

の活動は、共に拡大している「芸術」と「ファッション」両分野の概念を融合し、その活動によって、二つの関係をより近いものになっている。ファッションは時代の流れのなかで刻々と変化してきたが、今、コスミックワンダーのようなファッション・デザイナーの活動によって、また新たな段階へと踏み出したのである。

【主要参考文献】

- スザンナ・フランゲル『ヴィジヨナリーズ ファッション・デザイナーたちの哲学』ブルース・インターアクションズ、2005
- 『身体・夢 ファッション OR 見えないコルセット』京都服飾文化研究財団、1999
- 林央子「コスミックワンダーの軌跡」『装苑 3月号』文化出版局、2009
- いこま・よしこ『美術手帖 12 特集 COMME des GARÇONS』美術出版社、2009
- 平山景子「2001-2002 年秋冬 花椿パリコレ・エクスプレス、COSMIC WONDER」
- 資生堂ウェブサイト ©1995-2001 Shiseido Co.,Ltd. <https://www.shiseido.co.jp/s0103exp/html/cosmic.htm>